

Lung adenocarcinoma may be a more susceptible subtype to a dendritic cell-based cancer vaccine than other subtypes of non-small cell lung cancers: a multicenter retrospective analysis

高橋, 秀徳

<https://hdl.handle.net/2324/1806861>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名：高 橋 秀 徳

論 文 名：Lung adenocarcinoma may be a more susceptible subtype to a dendritic cell-based cancer vaccine than other subtypes of non-small cell lung cancers: a multicenter retrospective analysis

(非小細胞肺癌の中で腺癌は、他の組織型と比べて、樹状細胞ワクチンに対する反応性が高い組織型かもしれない：多施設共同後方視解析)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

非小細胞肺癌は全肺癌患者の約 85%を占め、進行期、すなわち手術不能もしくは術後再発例における生命予後は非常に厳しい状況が続いている。このため、新たな治療法の開発が強く求められている。

樹状細胞 (DC) は強力な抗原提示細胞であることが見出されて以来、肺癌を含む進行がんに対して、DC ワクチンを用いた臨床試験が世界中で多数行われてきた。我が国では「J-SICT (Japanese Society of Immunotherapy and Cell Therapy) DC (Dendritic Cell) Vaccine Study Group」に所属する医療機関が、共通の細胞調整工程に基づいて製造された DC ワクチンを、進行がん患者に対して概ね同様の治療手技にて提供しており、今回このグループに属する 6 施設において DC ワクチンを受療した、進行期・非小細胞肺癌患者 260 例における生存期間とワクチン療法の関連性について後方視的に解析を行った。

この結果、診断からの全生存期間中央値 (MST) は 33.0 ヶ月 (95%信頼区間：27.9-39.2 ヶ月)、ワクチン投与開始時点からの MST は 13.8 ヶ月 (95%信頼区間：11.4-16.8 ヶ月)であった。長径 30mm 以上のワクチン投与部位における発赤反応 (erythema reaction) と、ワクチン投与開始時点からの生存期間の間で、統計学的に有意に強い相関を認めた ($\geq 30\text{mm}$ vs. $< 30\text{mm}$ での MST：20.4 ヶ月 vs. 8.8 ヶ月、 $P < 0.001$)。これは、以前我々が報告した、進行腺癌症例 255 例における解析と同様の結果であった。さらに興味深いことに、この発赤反応と生存期間の相関は、腺癌群でも他の組織型 (非腺癌群) でも同様にみられた一方で、腺癌群の方が生存期間で有意に優れており (MST：腺癌群 15.3 ヶ月 vs. 非腺癌群 8.8 ヶ月、 $P = 0.003$)、長径 30mm 以上の発赤反応を認めた患者の割合も腺癌群において高かった (腺癌群 56.3% vs 非腺癌群 37.3%、 $P = 0.014$)。

本研究は、進行期・非小細胞肺癌患者に対する DC ワクチンの臨床的有用性を示唆する、初めての多施設共同研究報告である。本研究から、他の組織型と比較して特に肺腺癌に responder 率が高いことが示唆された。しかしながら、本研究はあくまで症例背景が不均一な集団における結果であることから、今後、より質の高い前向き比較試験での検証が必要である。